

* 「巨人の肩の上に立つ」“Stand on the shoulders of giants”

* このフレーズは Google Scholar にも記述があり、かのニュートンが言ったといわれています。「巨人」とは膨大な知識であり先達の成果でもあり、その「肩の上に立つ」ということはそれらの知識を基にすると遠くまで見通せて、いろいろなことが分かることの比喩というのが一般的な解釈だと思います。

* 巨人だけではなく、山に例えて想像を膨らますことも楽しいかもしれません。頂上へ向かって登山をすることは勉強をすることに対応するでしょう。登山には体力や技術や準備が必要です。例えば物理の山に登るには数学の知識が必要です。数学が体力であり技術であり準備に対応します。

* 山の登り方にはいろいろあります。ゆっくり麓から歩いてゆく、自力で勉強して理解するわけです。途中までロープウェイ、ケーブルカーがあれば比較的早く登れます。講義を聞いて教わるようなものかもしれません。休んだら乗れません。寝ていると車窓からの眺めを楽しめず、後で振り返っても何も覚えていません。どうにか終点にたどりついてても(単位をもらうことができても)、どの程度その山を理解できたかは本人の努力次第ということになるでしょう。

* ヘリコプターで一気に頂上へ行くこともあるかもしれませんが。途中は全部省略です。つまり途中は分からないけど何となく使えている、という状況もあるでしょう。マニュアルに従っていれば何とかかなるけれど、一旦問題が起きるとどう対処したらいいのか分からない、作業者のような立場の人がこれに当たるのかもしれません。このときに山のことを熟知している人物がいないと、問題の解決方法が分からないでしょう。

* 物事が成熟してくるとヘリコプターになりがちでしょう。例えば、今私が使用しているコンピュータはその典型例だと思います。CPU などのハードウェア関係、OS などのソフトウェア関係、等々、細かいことは分からなくても使えているわけです。なぜ「a」のキーを押すと、ディスプレイ

上に「a」が表示されるのか、正確に説明できる人は限られているでしょう。分からなくてもこうして原稿を書けています。どのような原理で動いているのか分からなくても、とりあえず使えれば大丈夫なのかもしれません。

* 勉強法は基礎から応用へという登山型が一般的ですが、最初に応用を学び必要な基礎を学んでいく下山型の勉強法もあるのではないのでしょうか。「なぜ？」から始まる勉強もあるはずで、どちらにしても最終的に麓から頂上までを知り尽くすことができればよいわけです。

* 山にも幾つか種類がありそうです。元々存在する山に登ることは、新発見をしたり、自然法則を学んだり、物事の真理を追究することなどに対応するでしょう。新しい分野が切り開かれて発展した場合、新しい山が出来上がることになると考えられます。

* まさに学会の論文は新しい山を築いたり、山を大きくしたりすることに対応するのではないのでしょうか。山の出来方もいろいろでしょう。バケツで一杯ずつ地道に積み上げていくこともあれば、重機で一気で作ってしまうこともあるでしょう。噴火で山ができることもあるでしょう。

* また論文誌や会誌は毎月山を大きくしていくとともに、頂上(結論)までの過程を分かりやすく論理的に読者を導いていく、まさにその山のガイドブックにもなると思います。

* 学会の論文誌、会誌は会員の皆様をはじめ多くの方々の研究成果や原稿で成り立っています。皆様一人一人が山を大きくしたりガイドをしたりしており、編集委員会ではそのお手伝いをさせて頂いているわけです。

* 本誌が皆様のお手元に届く頃は年度が変わって会誌編集委員会の委員は一部交代しております。退任されました委員にはお疲れ様と申し上げます。そして、これからも新任の委員と一緒に皆様へ会誌をお届けできますよう努力して参ります。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

(編集特別幹事 石井孝明)